

北アメリカ東部の博物館をたずねて

大島光春 (当館学芸員)

1. はじめに

休暇を取って同僚の佐藤君と北アメリカ北東部へ行きました。主な目的は、博物館の見学でした。訪れた8館のうち、代表的な3館を紹介します。ワシントン D. C. のスミソニアン自然史博物館、ニューヨークのアメリカ自然史博物館、トロント (カナダ) の王立オンタリオ博物館です。

2. スミソニアン自然史博物館

ここでは客員研究員 (当時) の大路氏に案内していただきました。大路氏は佐藤君の学生時代の指導教官で、ウミユリの研究者です。無脊椎動物部門の研究室と液浸標本収蔵庫を見せてもらうことができました。収蔵庫の中は、40 m 四方くらいに感じられ、当館の大収蔵庫 (昆虫と液浸を除いた全ての資料が収まっている) より少し狭いくらいだと思います。この広さの収蔵庫が液浸だけで4フロアあると聞いたときには、我が耳を疑いました。全ての収蔵庫の体積 (面積でもいいけど) を合わせるといったいどれくらいの量になるのでしょうか。展示室も広いのですが、研究スペースの広さ、収蔵スペースの広さが日本の博物館とはけた違いでした。

恐竜の展示室は吹き抜けの2階部分が展示替えのために閉まっていた

が、1階部分は昔から凶鑑の写真で親しみのある (古くさい) 展示でした。

3. ワシントンのおすすめスポット

カニ屋さん The Dancing Crab でブルークラブを半ダース注文しました。するとテーブルには大きな紙が敷かれ、ナイフと木槌が、そして床にはバケツが置かれました。香辛料で真っ黒なガザミを持ってきたウェイトレスが「初めてか」と聞くので、うなずくとレクチャーが始まりました。はさみの付け根にナイフを当て木槌でガンガンたたきます。そこからバキッと割って「ほーらできた」身は溶かしバターなどをつけて食べます。あとはちらかしながらガンガン割って、食べて、殻はバケツへ。最後に紙をグシャッと丸めてこれもバケツへ。とそんなわけで遊び感覚で、おいしいカニを食べられて楽しい体験でした。

4. アメリカ自然史博物館

当館所蔵のケース・コレクション (化石軟骨魚類の歯) を収集された G. R. ケース氏に案内していただきました。

伝統のある博物館ですが、最近エントランスホールのパロサウルスを後脚で立たせたことで話題になりました。私のお目当ては最近更新された恐竜展示室でした。鳥盤目と竜盤目の2つの展示室に分けられており、どちらも大変充実していました。

当館ではパネルで説明している恐竜の咀嚼サイクルが、実物大の動く模型で再現されていました。とにかくすごいのは実物を組み立てたり、パネルマウントしたものが、ところ狭しと置かれていることでした。さすがは恐竜発掘・研究の老舗です。

もちろん恐竜ばかりではなく、哺乳類化石、特に大型哺乳類についても、理解しやすい展示がなされていました。ウマやゾウの系統的な展示はよくあるのですが、私の研究テーマである化石イノシシについての展示を初めて見たので感激しました。

5. ニューヨークのおすすめスポット

博物館を見学中、ケース氏にのどが渴いたと思ったら、売店のある薄暗いホールへつれて行かれました。シロナガスクジラの模型をつるした大きな展示室でした。そこでケース氏がビール

をおごってくれました。鉱泉水で造った The Rolling Rocks というビールだそうで、すっきりしていました。たとえば甘くないラムネのような感じでしょうか。クジラの腹の下で飲む The Rolling Rocks はおすすめです。

6. 王立オンタリオ博物館

今回訪れた博物館の中で唯一の総合博物館です。ここに留学して魚竜の研究をしている藻谷氏の案内で、古脊椎動物の収蔵庫やプレパレーション室 (化石の剖出作業などを行う)、研究室等を見せてもらうことができました。

プレパレーション室にはいろいろな道具がありました。特に感心したのは環状照明付き蛇頸実体顕微鏡でした。実体顕微鏡が水平方向に自由に動くアームに取り付けられており、対物レンズの周りには環状照明があるので、影のない像を観察できる優れたものです。

この恐竜展示はイグアノドン類やカモノハシ竜のパネルマウントで有名なのですが、新しくマイアサウラ・プロジェクトと銘打った展示がされていました。カモノハシ竜や角竜の頭骨化石もすばらしい標本なのですが、大画面に映し出されるマイアサウラの行動を復元した CG がよくできていました。豊富な収蔵品を有する博物館でも、新しい展示手法にチャレンジする姿勢が感じられました。

7. トロントのおすすめスポット

カナダ国鉄ユニオン駅のオンタリオ湖側に高さ 553.33 m の CN Tower があります。この塔の展望台の床の一部がガラス張りなのです。私が高所恐怖症気味のせいかもしれませんが、この地上数百メートルのところにある 3m×5m 位のガラスの床は普通ではありません。梁のところを綱渡りするように歩いていると、佐藤君に押されて死ぬかと思いました。

8. おわりに

今回訪れた博物館は世界最大級です。ですが、やっぱり日本の博物館と比べたくなくなってしまいます。前述の収蔵庫や研究設備の他にも、キュレーターの数、テクニシャンやデザイナーの有無など、伝統の差だけではない、姿勢の違いがあるように思われます。



写真1. スミソニアン自然史博物館



写真2. スミソニアン自然史博物館の無脊椎動物部門液浸標本収蔵庫